

お女郎池の由来

じょろういけ ゆらい

今朝、お女郎池で身投げがあったと、噂はたちまち町中に広がり、可哀相だなあと人の同情を誘いました。そもそもこの人は、越後の片田舎の貧しい農家に生まれました。打ち続く凶作で食べるものもなく、せめて口減らしにと五歳のころ、わずか四〜五両（円）の金で、郭に身売りされたのでした。

知らない土地に来て、全然環境の違う社会で、何もわからないことばかりでした。芸を覚えるには、厳しい稽古を毎日毎日繰り返さなければならず、覚えが悪ければ悪いでいじめられ、日夜心の中で、お父さん、お母さんと呼んで、人目を忍んで泣いたとのことでした。そして厳しい稽古と、躰に耐え、ようやく一人前に成長し、一時は郭で一、二と名が出るようになり、ようやく親孝行もできると喜んでおりました。そして近郷の若者たちの目を引くようになりました。

そこへ、ひよんなことに、農家の青年で真面目で心の優しい若者と恋におちいり、末の世まで誓うようになり、国の両親にも知らせたりして、愛し愛されていました。青年は繁しげく通うようになりましたので、お金に困るようになり、恋は盲目にするとか、この真面目な青年が、心にもなく盗みをしては、彼女のところに通い続けたのです。彼女も自分で都合出来るお金は全部使い果たしたのでした。

悪事の知れないことはないと言われますが、彼の若者はついに逮捕されました。初めての深い深い恋におちいり、男を信じ愛したのに、なんと不仕合ふしあわせな自分かと、わが身を嘆き悲しんでいました。また郭の掟と板挟みになり、日夜人知れずに泣き続けて、だれに話すこともまた相談する人もなく、遂に思い余ってあの池に身を投げて、自殺したのでした。

そのようなことがあって、だれ言うことなく「お女郎池」というようになり、そして赤い腹いもりの井守が生息して、人々は女郎の変身といって、気味悪がられたそうです。終わりに、この身投げは大正十年前後でした。